

# 鮭鱒語源考

岡吉良一

鮭（さけ）

鮭は鮭，鯉，鰻魚，年魚，自死魚，金鱈魚，北魚，松魚，鱧，劍，等々の漢字を当てている。また，すけ，しゃけ，あきあぢ，よっこ，おうすけ，うをこ，などの異名を持ち，アイヌ語ではカムイチエプ，シベセツプ，アキアンチなどがあつる。また中国では日本とは逆に英語の Salmon をもちつて，撒蒙（サーモン），蛇門魚，山門魚，あるいはまた略して沙魚（日本のハゼは砂魚）とも書く。その他まだまだ異名はあるが，ここではサケという日本の標準名について，その語源を考えるのが目的だから一応打切つておく。

さて，従来サケの名の語源は

1. サケは裂けの意で，その肉が裂けやすいから
  2. マスの大きいのをスケというところからその転訛とするもの
  3. アイヌ語のサクイベからの転訛
  4. 瀬蹴の転訛
- などが代表的な考え方である。

しかし筆者はどうも納得しがたいものを感じて仕様がなないので，全然言語学の素養のない事を承知の上でサケの語源をさがして見たのである。まさに目くらの手さぐりである。専門の語学者から見たら，おそらく臍で茶を沸かすの仕儀でもあつらうか。

さきに挙げた1～4の考え方の出典は

和漢三才図絵，大言海，新編日本古語辞典，林氏日本言語学，日本訳名，本朝食鑑，北越雪譜，常陸風土記などによるのであるが，これは皆サケという語を単一語と考えているところに日本語の成立を誤ち考えているのではなかつらうか。例えば日本の古語で吾れ，私，はワ，もしくはアであり，汝れ，はナである。海（ウミ）はウ（大）ミ（水）である。鼠は（ネ），兎は（ウ），牛は（ウ）大（シ）肉であるとした場合，鮭（サケ）の語も（サ）と（ケ）とに分けて語意を探つて見るのが本当ではなかつらうか。古語で（サ）の音はいろいろに使われているようだが，まず感動詞としての（サもこそ）という場合の然りを意味する（サ），名詞，動詞に冠しての発語で（小）（狭）（真）を表す（サ），弓の箭を表す（サ），その箭が発進する（発）を意味する（サ）などが考えられる。このうち箭の音（サ）は朝鮮語の（Sar），蒙古語の（Somo）であつらうと中島利一郎氏は言つておられる。発の字を（サ）と読むのも蒙古語の（Sol）で相共にある物が動き進む形を表した語である。また冠詞としての（サ）の音の中で「真」を表す場合もここで記憶しておきたい。

次に（ケ）の音のもつ意味は気または勢，また食物の食（ケ），蹴（ケ）ルなどがある。今これらの中から（サケ）と組み合して見ると，真（サ）食（ケ）と

なり、アイヌの鱒をサクイベ（夏の食物）と似通って来る。また溯上する鮭の勢いが箭の発進するように、また水を蹴って跳り上げる様を（箭サ蹴ケ）あるいは（発サ気ケ）とも発音したと考へてもよいのではないか。

日本語は随分いろいろな民族語系が入り込んでいて語源探究も容易でない。かつて数年前安田徳太郎博士はレプチャ語源流説で学界から批判されたが、素人間には大変受けたことがあるように、朝鮮語、蒙古語、アイヌ語、チベット語、ビルマ語、ポリネシア語や南方諸島各人種語（曾って松岡静雄氏は日本古語大辞典によって日本語南方発生説を主張し、われわれもそう考へた時もあった）等々、どの民族の語とも連絡がつくのである。それは兎に角として、わが日本語は一音毎に何かを表していたのが生活の進歩複雑化とともに、また変化したことはもちろんで、その間各種民族が混交して世界中でもっとも難解の言葉となったといえる。しかし名詞単語の語源を求めるにはどうしてもこの一音表示の点まで追求しなければ完全でない。鮭を（サケ）という二音構成のままの意味で語源を求めることはまちがいである。鮭類のように人類発生以前から生存しているものは異民族が長い長い間に移動混交した中で復合してできた言葉をそのままの単語として語源を求めてはならないと思う。

#### 鱒（ます）

鱒、赤目魚、赤目鱒、鮭、鮭、鰻、腹赤魚、鮭、ハラカ、爾倍魚（にえお）などの漢字を当てている。アイヌ語ではイチヤニ、エヂヤニ、イチヤヌイ、チヤニウ、サギベ、サケビ、サクイベ（夏の

食物）など各地のアイヌによって方言がある。ニヤルカ、ネルカ、クラスナヤなどはカムチャッカ方面の露人語である。

この魚は肥後風土記に記された景行天皇がクマソを討伐した時献上された魚を見てその魚名をたづねたが、まだその名がなかったので、爾倍魚（御贅の魚）としたという故事が一番早い文献である。この魚を万須（ます）と訓じているが、古来このマスという語は真（マ）、巢（ス）の二音からなり立つもので、マは真実の意であり、スは巢であり棲ムであり、また集ルで魚類の群れるところである。またマスと綴ると、その意は増ス、殖えるなどを意味して魚の群れ蕃殖するところを表すのである。アイヌ語のイチヤニはその産卵孵化増殖する場所を表したものである。これを人の生活に当てると、栖であり、洲であって、人が集まり栖むところとなる。古えは河口に多く集り、洲の上に住居した。洲はまた沙であり砂である。また竹篠、葦茎などで席（ムシロ）を編み、敷物にし、屋根覆いにして家とした。これを人の巢、栖としたので洲、栖、簀となったことも考えられ、また人集る所故集（ス）という意もできたであろう。

なおマスをマスホあるいはマソホの赤いという語の約言転訛であるとする説もある。もちろんこれは鱒の肉色が赤いところから来ているので、赤土をソゴ土、紅色をスホーというのと同様で、紅魚という意である。

（全日協相談役）